

## 『言語研究』執筆要項

1. **投稿原稿のカテゴリー**：会員が投稿できるカテゴリーを次の4つとする。
  - a. 論文（完成した研究論文）
  - b. フォーラム（aのカテゴリーに属さない小論文や萌芽的な研究，他者の論考に対する批判的考察など）
  - c. 書評論文（他者の出版物に対する批判的考察で独自の提言を含む論文）
  - d. 書評・紹介（他者の出版物に対する短評）
2. **使用言語**：日本語，英語，フランス語，ドイツ語とする。
3. **原稿の様式と提出方法**：
  - a. 論文は原則として「『言語研究』投稿・審査システム」（以下、投稿・審査システム）によって提出する。投稿・審査システムにアップロードするファイルは、下記(c)の「論文本体，注，参考文献，要旨」を合わせてひとつのPDFファイルとしたものとする。やむを得ない理由により投稿・審査システムが利用できない場合は、事務支局に連絡を取って、紙面による投稿の方法を確認すること。
  - b. 原稿はA4判用紙，上下左右に2.5cmのマージンをとり，図表や例文を含まない1頁が約900字（邦文），あるいは約350語（欧文）になるように書式を調整した上で，図，表，文献等を含め，邦文論文・欧文論文ともに，40頁以内，フォーラム欄用原稿は同じく15頁以内，書評論文は20頁以内，書評・紹介は10頁以内とする。この指示に従っていない原稿は，原則として受領しない。
  - c. 原稿は，以下の順序，体裁で整える。論文本体，注，参考文献，要旨の総てのページに通し番号をつける。
 

**論文本体** 冒頭に論文名（副題も含む）を書き，使用言語による最大5個のキーワード（研究の分野や方法をよく示すもの），そして本文と続ける。査読は匿名で行われるので，執筆者名，所属機関名は書かない。また，本文中でも執筆者名が特定できるような表現はできるだけ避ける。

**注** ただし，引用のためだけの注は付けない。

**参考文献** 参考文献にローマン・アルファベット以外の表記を含めた場合（詳細は6を参照），インターネット公開用にローマン・アルファベット表記（日本語のローマ字表記・ピンイン等を含む）のみによる参考文献リストを，採用が決定してから別途提出する。

**要旨** 邦文論文・欧文論文とも，日本語（400字以内）と欧文（20行以内）の両方の要旨を付ける。ただし，論文言語と異なる言語による要旨は，論文の採用が決定してから提出してもよい。

4. 特殊文字ならびに日本語のローマ字化：ギリシア文字・キリル文字以外の特殊文字はローマ字化する。音声字母は可能な限り国際音声学協会所定のもの（最新のもの）を用いる。造字を要する特殊文字は、必要不可欠の場合を除き、避ける。欧文論文における日本語のローマ字化は次の方針に従う。

- a. 例文については原則として訓令式を用いる。

例 zibun（自分），bunpoo もしくは bunpō（文法）

- b. 参考文献（欄）の固有名詞以外については下記の①，②を除き，ヘボン式あるいは訓令式を一貫して用いる。

例 …ni tsuite または …ni tuite（…について）

- ① 撥音の「ん」には一貫して n を用いる。

例 bunpoo（文法），onbin（音便）

- ② 長音は，母音字の上に横棒（マクロン）を付す表記か，同じ母音字を続けて書く表記のいずれかを一貫して用いる。

例 hoogen, hōgen（方言），kenkyuu, kenkyū（研究）

- c. 参考文献（欄）の固有名詞については，慣例，または本人の表記に従う。

例 *Gengo Kenkyu*（『言語研究』），Takesi Sibata（柴田武），  
S.-Y. Kuroda（黒田成幸），Mamoru Saito（斎藤衛），  
Shirō Hattori（服部四郎），Kurosio（くろしお出版），  
Hituzi Syobo（ひつじ書房），Tokyo（東京）[地名]，  
Osaka（大阪）[地名]

慣例が定まっていない固有名詞や本人の表記が不明な人名については，上記の b（固有名詞以外の場合）に準ずる。

5. 例文表記：例文と本文の間は 1 行空ける。例文には丸括弧で通し番号を付け，字下げせずに左揃えとする。執筆言語と異なる言語の例文には，必要に応じて，各単語ごと（場合によっては形態素ごと）にグロスを，そして全文の訳を以下のいずれかの方法に準じて付ける。また，使用する略語は別途説明する。

- (1) ba naashnish.

for.him I.work (for:him, I:work も可)

‘I work for him.’

- (2) b-a naa-sh-nish.

3OBJ-BEN ADV-1SG.SUBJ-work

‘I work for him.’

- (3) b-a naa-sh-nish.

3目的-受益 副詞 -1 単主語-働く

「私は彼のために働く。」

- (4) Hanako wa imooto to eiga o mi-ta.

Hanako TOP sister with movie ACC see-PAST

‘Hanako saw a movie with her sister.’

6. **注および参考文献**：注は通し番号を付け、論文末に別紙にまとめる。参考文献は、本文または注において引用または言及されたもののみを、次の形式に従って論文末に別紙にまとめる。

- a. 項目は第1著者のアルファベット順に並べる。ただし、言語ごとに分け、当該言語の慣例的な配列順に従ってもよい。
- b. 同一著者の文献は発表年の順に並べる。
- c. 同一著者の同一年の文献には a, b, c などの添字を付ける。
- d. 同一の単行本（論文集）から複数の論文が引用されている場合には、単行本を編者名による1つの項目として立て、各論文はそこへの参照とする。
- e. 著（編）者名は、N. S. Trubetzkoy, R. H. Robins のように慣例的な場合を除き、フルネームを使用し、イニシャルを用いない。
- f. 欧文で複数著者（あるいは編者）の場合、著（編）者名は、「第1著者の姓、第1著者の名（、第2著者の名 第2著者の姓、....）and 最終著者の名 最終著者の姓」のように並べる。なお、英語以外の言語で書かれた文献の場合、and の代わりに、それぞれの言語で and に相当する等位接続詞を用いてもかまわない。また、さまざまな言語の等位接続詞を使い分ける代わりに、言語に関係なく一貫して & を用いてもかまわない。
- g. 各項には、著（編）者名、発行年、論文名、頁等を以下（句読点も含む）に準じて記載する。

〔**雑誌論文**〕 第1著者名・他の著者名（発行年）「論文名」『雑誌名』巻数：頁数。

（巻全体で通しの頁番号が打たれている場合は巻数だけで、号数は不要。

号ごとに頁番号が付けられている場合のみ、巻数と号数を記す。）

**例** 佐久間鼎（1941）「構文と文脈」『言語研究』9: 1-16.

**例** 服部四郎（1976）「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5(6): 2-14.

**例** Postal, Paul（1970）On the surface verb “remind”. *Linguistic Inquiry* 1: 37-120.

**例** Kay, Paul and Chad K. McDaniel（1978）The linguistic significance of basic color terms. *Language* 54: 610-646.

〔**論集などに所収の論文**〕 第1著者名・他の著者名（発行年）「論文名」編者名（編）『論文集名』頁数. 出版地：出版社.

**例** 金田一京助（1955）「アイヌ語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説 下』727-749. 東京：研究社.

**例** 上野善道（1997）「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫（編）『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』231-270. 東京：三省堂.

**例** Kiparsky, Paul（1968）Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171-

202. New York: Holt, Rinehart and Winston.

[**単行本**] 第1 著者名・他の著者名（発行年）書名。（必要な場合は）版、（該当する場合は）シリーズのタイトルと巻号。出版地：出版社。

**例** 柴谷方良（1978）『日本語の分析：生成文法の方法』東京：大修館書店。

**例** 林四郎・南不二男（編）（1974）『世界の敬語』，敬語講座第8巻。東京：明治書院。

**例** Haegeman, Liliane（1994）*Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

**例** Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle（1963）*Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge, MA: MIT Press.

[**学位論文**] 著者名（提出年）「論文名」学位論文の種類，大学名。

**例** 梶茂樹（1992）「テンボ語音韻論：その共時態と通時態」博士論文，京都大学。

**例** Sag, Ivan（1976）Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

[**研究発表**] 発表者名（発表年）「発表題目」発表学会名および発表の種類。会場，発表年月日。

**例** 橋本萬大郎（1966）「文法構造の関係概念と範疇概念」日本言語学会第55回大会口頭発表。京都大学，1966年10月16日。

**例** Liberman, Mark（2007）The future of linguistics. Invited plenary address at the 81st Annual Meeting of the Linguistic Society of America. Hilton Anaheim, 6 January 2007.

[**ウェブサイト**] 著者名（発表年）「サイト名」URL [アクセス年月]。（発表年不明の場合省略可）

**例** 文化庁「平成24年度「国語に関する世論調査」の結果について」  
[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/yoronchousa/h24/pdf/h24\\_chosa\\_kekka.pdf](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h24/pdf/h24_chosa_kekka.pdf) [2014年6月アクセス]。

**例** Lewis, M. Paul, Gary F. Simons and Charles D. Fennig (eds.)（2014）*Ethnologue: Languages of the world*, seventeenth edition, online version. <http://www.ethnologue.com> [accessed June 2014]。

- ・欧文の著書・論文名は，それぞれ項目の頭文字（および固有名詞）のみを大文字とする。（ただし，ドイツ語の名詞のように慣例的に頭文字を大文字にするものは，それに従う。）
- ・邦文で執筆された単行本，論文を欧文論文で引用する場合は，上記の欧文文献の表記に準ずることとする。また，書名，論文名にはできるだけ訳語をつける。

- 例** Yamada, Yoshio (1908) *Nihon bunpoo-ron* [*Japanese grammar*]. Tokyo: Hōbunkan.
- 例** Kuroda, S.-Y. (1980) Bunpoo no hikaku [Comparison between Japanese and English grammar]. In: Tetsuya Kunihiro (ed.) *Nichieigo hikaku kooza 2: Bunpoo* [*Comparative studies of Japanese and English 2: Grammar*], 23–62. Tokyo: Taishukan.

以下にアルファベット順に配列した例を示す。

### 参考文献

- Bach, Emmon (1968) Nouns and noun phrases. In: Bach and Harms (1968), 90–122. 【同一論集に所収の複数の論文】
- Bach, Emmon and Robert T. Harms (eds.) (1968) *Universals in linguistic theory*. New York: Holt, Rinehart and Winston. 【論文を所収する論集】
- Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt. 【単行本】
- Frey, Werner und Karin Pittner (1998) Zur Positionierung von Adverbien. *Linguistische Berichte* 176: 489–534. [Frey, Werner & Karin Pittner (1998) …のように & を参考文献（欄）で一貫して用いてもよい】 【複数著者による英語以外の欧文論文】
- Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell. 【単行本】
- 服部四郎 (1976) 「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5(6): 2–14. 【論文】
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1966) 『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院. 【複数著者による単行本】
- Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge, MA: MIT Press. 【複数著者による単行本】
- 梶茂樹 (1992) 「テンボ語音韻論：その共時態と通時態」博士論文，京都大学. 【学位論文】
- 金田一京助 (1932) 『国語音韻論』東京：刀江書院. 【単行本】
- 金田一京助 (1955) 「アイヌ語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説 下』727–749. 東京：研究社. 【事典等の項目】
- Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Bach and Harms (1968), 171–202. 【同一論集に所収の複数の論文】
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press. 【複数著者による単行本】
- Langacker, Ronald W. (1993a) Grammatical traces of some “invisible” semantic constructs. *Language Sciences* 15: 323–355. 【同一著者による同一年の複数の論文】

の文献】

- Langacker, Ronald W. (1993b) Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4: 1–38. 【同上】
- Postal, Paul (1970) On the surface verb “remind”. *Linguistic Inquiry* 1: 37–120. 【論文】
- Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT. 【学位論文】
- 佐久間鼎 (1941) 「構文と文脈」『言語研究』9: 1–16. 【論文】
- Scalise, Sergio, Antonio Fábregas and Francesca Forza (2009) Exocentricity in compounding. *Gengo Kenkyu* 135: 49–84. 【複数著者による論文】
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析：生成文法の方法』東京：大修館書店. 【単行本】
- Trubetzkoy, N. S. (1971) *Grundzüge der Phonologie*. 5. Auflage. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. 【単行本】

- ・本文および注における参照文献への言及は以下の要領に準じて行う。必要に応じて著者名をフルネームで記してもよい。

例 この問題については、山田孝雄（1908）も論じているように……

例 山田（1908: 584）は、「助詞は単独にては何等の観念をもあらはし得ず、他の観念語に附属して始めて其の義を認むるを得るのみ」と言う。

例 ……の研究には平山ほか（1966）がある。

例 Sapir（1925）notes that…

例 As pointed out by Scalise et al. (2009: 50),…

例 Bloomfield（1933: 347）remarks as follows: “The assumption that the simplest classification of observed facts is the true one, is common to all sciences …”

例 In Optimality Theory (Prince and Smolensky 1993, Kager 1999),…

例 … as often mentioned in the literature (Chomsky 1980, 1990, Bresnan 1990, 1991, Hale 1996).

（2017 年 3 月改訂）